

## 二冊の書籍といくつかの奇縁 その1 女流歌人原阿佐緒の生涯

原阿佐緒は、1888年(明治21年)宮城県黒川郡宮床村(現在の黒川郡大和町・たいわちよう)の地主で、塩・麴などを販売する裕福な商家の一人娘として生まれた。原家は、代々伊達家の分家(宮床伊達)に仕える家臣だった。

明治28年、宮床尋常高等小学校に入学したが、生徒数が少ない山村の学校に不安を感じた父親の意向で、明治29年に近隣の吉岡尋常高等小学校に転校。父親はこれでも満足せず、黒川郡の視学(教育行政上の監督官)として赴任した土屋鑛蔵に娘の教育を托した。

原家には家督を継ぐ者(男)がいないことから、明治29年に遠縁の遠藤家から真剣(またち)を養子として迎えた。明治20年生まれで、原阿佐緒から見れば一才違いの兄という存在だった。

視学土屋鑛蔵の家に起居して通学することになったのだが、明治30年に土屋は伊具郡角田町の角田中学校の教員として転任。これに伴い、原阿佐緒は土屋家と行動を共にして、角田尋常高等小学校に転校。1898年(明治31年)、土屋が香川県に転任になることで土屋の関与は終り、元の吉岡尋常高等小学校に戻った。

父幸松は、新しいものに果敢に食いつく人で、明治という新時代に相応しくと考えて、代々受け継がれた古家を壊して、白壁の洋館風の建物に建て替えた。

母しげは、黒川郡内の酒造りを業とする富豪の遠藤家から嫁いできた。子どもの頃から花道・茶道・三味線・舞踊等の教養を身につけさせられて育ち、我が娘にも「他人とは別格の人間」として教育した。教育熱心で進取の気性に富み寛大な父親と、才色兼備で厳格な母親に育てられ、近隣への外出は召使いに伴われて人力車や馬車でということが多く、友達はあまりいなかったらしい。

叔父寅松夫妻に可愛がられ、頻繁に寅松家に入出入りしていた。寅松は漢学・洋書・南画・和歌などの素養があり、文学的・芸術的なものはここで培われたと自伝的エッセイに書き記されている。

1900年(明治33年)、父幸松が「この子のために全財産を使え」と遺言を残して35才で世を去ってしまった。原家の家督は、養嗣子真剣が14才で継ぐことになった。

原阿佐緒が残した歌から、父親は目が悪い上に大酒飲みで、母親が色々苦勞してきたことが読み取れ、いくつかの歌の中に、父親の早逝の衝撃が表現されている。

秋風や父の姿の変りたる 石に額伏せ涙するかな  
目盲ひたる大酒の父と うら若き母思ひ今もかなしき

1901年(明治34年)仙台の宮城県立高等女学校に進学したが、寄宿舎生活にも慣れず楽しくない学校生活だった。肋膜炎により三年で中途退学して、故郷の宮床村に帰り療養。

この間に多くの書籍を読み、漢詩・日本画なども学んだ。病の快復後、1904年(明治37年)に母の勧めもあり、上京して日本女子美術学校に入学。ここで同郷(仙台生まれ)の庄子勇(しょうじいさみ)と出遭う。東京美術学校で絵画を学び、文学もよくする3才年上の兄のような存在で、幼時に父を亡くした16才の女性にとっては、父性を感じる存在でもあったらしい。

原阿佐緒はさらに、国語の教鞭を執っていた下中弥三郎(後の平凡社創始者)に短歌を学び、これが女流歌人誕生のきっかけになった。

美術・文学に充実した日々を送っていた最中、1905年(明治38年)に養嗣子真剣が肺結核のため

19才の若さで病死。原家の家督は18才の一人娘が継ぐことになった。

「養子として迎え入れた真剣と阿佐緒を将来結婚させて、原家の家督を継がせる」という計画だったことが明かされたのだが、真剣の死後に初めて知り、原阿佐緒の心が再びえぐられることになり、残された歌にその時の心境が表われている。

その日まで恋はれてあるを知らざりし 死のきはにのみ抱きける人  
わが兄の冷たき石碑みつめつつ懺悔に似たる涙流すも

父の早逝、繋がりがあった祖父の死に加えて襲いかかったこの出来事は、単なる身内の死という衝撃のほかに、旧家の没落をも感じさせるできごとだったのかもしれない。こんな歌が残されていた。

幸は光は人に盗まれて 暗きわが家にのこるかなしさ

日本女子美術学校で英語・美術史の教師小原要逸と出遭う。短歌を学ぶきっかけになった下中弥三郎の同僚で、明治12年生まれ。

ある日、小原要逸の突然の陵辱を受けて、不幸にも妊娠してしまった。小原はこの時すでに三人の子がいる既婚者だったが、彼女がそれを知ったのは事後だったという。

妻子ある教師との関係がもとで、この学校には居られなくなり、1906年(明治39年)に他の美術学校に転校。罪悪感と苦悩と絶望から自殺を図ったが一命をとりとめ、1907年(明治40年)に20才で男児を出産。翌年故郷で披露宴を開いて体裁を繕ったものの、「父のない子を生んだ女」という周囲の目は冷たく厳しいものだった。小原要逸とは結局は離別することになったが、生まれた長男千秋を抱えて厳しい生活になった。のちに無声映画の時代に映画俳優・監督として活躍した原千秋氏である。この頃から、次第に作歌に熱中するようになった。

\*1909年(明治42年)、「女子文壇」に投稿した歌が与謝野晶子に認められて天賞を受賞。

この涙つひに我が身を沈むべき 海とならむを思ぬはじめ

この年、宮城女学校の絵画教師となり、歌の方では、与謝野晶子に師事して新詩社に加わり、その後スバル・アララギ等の会員となり歌壇での活躍が続いた。

1912年(大正元年)、仙台で文芸誌「シャルル」創刊にあたり賛助員として参加。ここでアララギの歌人古泉千樫(こいずみちがし)と出会い、交友が始まる。

相別れかくありながらわが命 たゆる日あらばあらばとぞ泣く

原阿佐緒の歌の中に滲み出る「哀れさ」に心が傾いて行ったのがきっかけと思われる。後年、次男の原保美氏(後述)の手元に残っていた大正2年の書簡によれば、二人が男女の関係に至っていたことが読み取れるとのことであるが、心の内は揺れ動いていたことが歌からも読み取れる。

捨てても得ぬ保ちもあへぬ恋ゆえに わが煩ひのしげきことかな

しかも、古泉千樫の身边には大きな事件が襲いかかってきた。乳飲み子を抱えていた古泉千樫の妻は、二人の関係を知り苦悩の末に乳が出なくなり、これが元で生後3ヶ月の娘は命を落とすことになった。そこへ日本女子美術学校に入学して上京した頃に色々世話になった洋画家の庄子勇が再び現れて、事態は一変する。

\*1913年(大正2年)、第一歌集「涙痕」を刊行。(与謝野晶子が序文)

あなかなしばかりふかく思はると 知らざりし日に見つめるその君  
わがために人を迎ふと壊れたる 家つくろへり心はいかにせん

1914年(大正3年)、東京美術学校出身の洋画家庄子勇と結婚。傷ついた原阿佐緒を救った初恋の

人という位置づけだったのか、没落寸前の原家を救おうとしたのかはわからないが、婿養子として迎える形の結婚で、正式に入籍した。

1915年(大正4年)に男児を出産。次男は、昭和の時代に映画俳優・舞台役者として活躍した原保美氏である。保美氏はのちに洋画家中川一政の娘桃子と結婚し、夫妻で晩年の原阿佐緒を支えた。そもそも小柄な体だった原阿佐緒は出産後も体調不良が続き子育てに苦労したようだが、

浅草の赤く匂へる灯は 妬たし君を酔はしめ家にかへさず

夫はそれを顧みることなく遊興にふけり、母との関係も日に日に悪化の途をたどった。

\*1916年(大正5年)、第二歌集「白木槿(しろむくげ)」を刊行(この年より斎藤茂吉に師事)歌集「白木槿」の巻頭の一作が、自らの心境を示しているように見えた。

白木槿秋来て咲きぬ末の世の吾が尼姿見る心地して

1917年(大正6年)、異常妊娠のため手術を受けることになり東北帝国大学病院に入院。この入院で、原阿佐緒は不妊の体となった。

アララギ派の重鎮で、東北帝国大学教授である物理学者の石原純(あつし)が見舞ったことで接触が始まった。

庄子勇は売れない画家として、原家の財だけを切り崩し、結婚生活は破綻に近づいており、この年協議離婚。

この時期に原阿佐緒は、新聞記者の真山孝治に心を寄せていた。自身のメモの他に三ヶ島葎子(みかじまよしこ)が残した資料の中でもそれは明かだったが、そこに石原純が登場した形になった。石原純は1881年(明治14年)生まれ、アインシュタインの相対性理論を日本に持ち込んで紹介した物理学者で、アインシュタインの来日講演の時には通訳もした人。また、伊藤左千夫に師事して短歌を学び、アララギの同人として顕著な活動をしていた歌人でもあった。妻子(子ども5人)がある身ながら原阿佐緒に一方的に夢中になった。原阿佐緒は石原の猛攻を避ける目的で、アララギの仲間の三ヶ島葎子宅に逃げ込んだり、病み上がりの原阿佐緒宅を三ヶ島葎子が訪ねたりの往来をしていた。三ヶ島葎子は1886年(明治19年)埼玉県入間郡生まれで、原阿佐緒の二才年上、境遇に共通点が多いことからか、原阿佐緒が心を許して話ができる数少ない友人だった。余談になるが、三ヶ島葎子の異母弟は、映画俳優として活躍した左ト全氏。

病み臥やる吾が辺にありて袷縫ふと 針もつ遠く来し友が

友はけふも吾子と遊べり遠く来て いまだ心の落ちつかぬならん

その後も猛攻は収まらず、やむなき策として三ヶ島葎子を伴って石原純の妻を訪ね、「私が呼んでいる訳ではない。もう私を追いかけさせないでくれ」と懇願。ところがこれが逆に火に油を注ぐ形になってしまった。三ヶ島葎子夫妻は頻りに石原純を訪ねて奔走・尽力を続けた結果、石原純の気持が純粹であることがわかり、少しずつ心が傾き始めた。

夜につぎて雨ふりしきり投げ込まれし 手紙をさぐる土間はしめれり

そして、1921年(大正10年)二人の同居が始まった。東北帝国大学教授という要職にあったゆえに、スキャンダルとして新聞報道もされて、騒然となった。島木赤彦・斎藤茂吉などのアララギの要人の説得にもかかわらず、石原は思いとどまることはなく、結局東北帝国大学を辞職。「世間知らずの学者が、妖婦に誘惑されて…」という筋書きでの報道が広がり、原阿佐緒への悪評が始まることになった。世間の批難を一身に受ける形になってしまった原阿佐緒は、死を決して遺書を書いたのだが、母に発見されてしまい未遂に終わった。

母が言(こと)ひたかなしきにうなづきて 母を安め来てひとり泣きけり

\*1921年、第三歌集「死を見つめて」を刊行

沢蟹をここだ袂に入れもちて 耳によせきく生きのさやぎを

土埃(ほこり)あがる春のちまたを ぐれないの帽子被りゆく子供見ゆ

これまでの作品とは少し空気が違うように感じる歌が目立つが、心境に変化があったのだろうか。

原阿佐緒の故郷の新聞(河北新報)では、二人をモデルにした一年間の連載小説を掲載するなどの動きもあり、最早故郷に帰れる状況ではなくなってしまった。

二人は房総の保田海岸にある旅館(松音楼)にしばらく滞在した後、1922年(大正11年)には別荘(鬨日荘:あいじつそう)も建てて同棲生活を続けた。別荘は、松音楼の主の好意によるものらしい。

この年石原純は、アインシュタインの来日講演の通訳者として、恩師長岡半太郎とともに各地を巡る忙しい日々となり、原阿佐緒は一人で趣味人の生活を堪能することになった。

街ゆきて寒けき夕を訪ひ来つる この家の炬燵にぬくもりにけり

しかし、このスキャンダル騒動の結果、原阿佐緒はアララギを破門になり、石原純も脱会することになった。当事者二人のみならず、三ヶ島葎子など原阿佐緒を擁護する何人かの仲間がアララギを脱会し、1924年(大正13年)に北原白秋らが創刊した歌誌「日光」に集った。この事件への対応ばかりが原因ではないようだが、アララギの仲間は分裂してしまった。しかし、騒動を知って集った新規参入者により、アララギ会員が一時的に増加したというエピソードもあるらしい。「日光」に掲載された発表歌に、こんな歌があった。

高き辺にわが見おろせる海辺の町 昼ながらものの音絶えており

ためらはず今はし行かな君が辺を 遂に離れ来て空しさおぼゆ

この年、三ヶ島葎子は脳溢血で倒れ、右半身不随になってしまった。見舞いと看病のために保田からかけつけた原阿佐緒の心境が歌に残されていた。

思ひかけなき友の病かもわが名すら 言(こと)に云ひえずなりにけるはや

三ヶ島葎子は、昭和2年3月に42才で他界。原阿佐緒が保田から駆けつけた時には、もう茶毘に付された後で、落胆の大きさが歌に滲み出ている。

吾にのみ云ひたきこともありたらむ ただに死なせし悔の悲しさ

さらに、この年かつての恋人で、短歌の世界での交流が続いていた古泉千樫も他界。

保田に引っ込んだ二人の関係も徐々に変化し、石原が他の女性に走るのを見て、1928年(昭和3年)に原阿佐緒は別荘を抜け出して故郷の宮床村に帰ったが、このできごとさえも新聞紙上を賑わした。

\*1928年、第四歌集「うす雲」を刊行

心身ともに疲れ切った原阿佐緒は、この年11月に上京。1907年の自殺未遂事件の時に入院して助けられた病院に再び駆け込んだ。

うつし世のそしりののしりに堪え来つる いのちと思ふに病めばいとほし

その後、下中弥三郎(平凡社社長)の勧めで

\*1929年(昭和4年)、自選歌集「阿佐緒抒情歌集」を平凡社から刊行

一時的に三ヶ島葎子の妹(千代子)の世話になっていたが、千代子の結婚により、何もかも自分で切り拓いて行かなければならない状況になった。

1929年11月、歌舞伎座の近くにあるバー「ラ・パン」でマネキンガールとして働くことになり、1930年には数寄屋橋で酒場「肅々園阿佐緒の家」を開業。この年石原純と決別。

病身の吾にも出来る仕事として捨てがたく思ふかなしき吾なる

その後、映画会社に入社して女優・助監督・監督などを務めたりした結果、1932年(昭和7年)、直木三十五の紹介で東亜キネマに入社。自身の半生を元に原作を書き、自ら主演したサイレント映画「佳

人よ何処へ」が制作されたが、不評に終わった。

そして大阪に転居し、梅田でバー「あさをの家」を開業。どれもこれも、原阿佐緒の名声と風評を利用して仕組んだものに乗せられたに過ぎず、周囲の目も冷ややかで、特に歌壇人からの目は厳しかった。

歌よみの阿佐緒は遂に忘れられむか 酒場女とのみ知らるるはかなし

あてにならぬ人の情と思ふべきか かくもあまたにおかへられつつ

1934年(昭和9年)、室戸台風で被災し、長年書きためた原稿を失ってしまった。再び心に大きな傷を負うことになり、1935年(昭和10年)に母が残る故郷宮床村の生家に帰郷。

1943年(昭和18年)に母は77才で他界。

山の家に吾のみ安く生きなんかまどふことにもつかれてけり

1947年(昭和22年)、石原純は脳溢血で倒れ、保田の別荘で67才の生涯を終えた。

1951年(昭和26年)、長男千秋が映画制作で失敗して、原家の身代の殆どを失ってしまった。

原阿佐緒の困窮状態を知った古くからのアララギの仲間が支援を開始。

1954年(昭和29年)、故郷宮床村を離れて、真鶴の次男原保美邸に同居。1959年(昭和34年)、原保美邸の転居に伴い杉並区永福町に移った。

歌人としては歌壇からすっかり忘れられた存在になったが、1957年(昭和32年)頃から短歌に変わって俳句に手を染め、水原秋桜子に師事し評を得るようになった。

1961年(昭和36年)、仙台市の大年寺山の野草園の前に第一歌碑が建立された。

家ごとにすもも花咲くみちのくの 春べをこもり病みてひさしも

宮床村の生家の庭に第二歌碑が建立された

沢蟹をここだ袂(たもと)に入れ持ちて 耳によせきく生きのさやぎを

杉並区永福町の家に住むようになってからは、臥床の日が多くなり、次男原保美の妻(桃子)が看病に努めたが、1969年(昭和44年)2月21日、老衰による心不全で逝去。(82才)

以上

●参照した資料:「原阿佐緒の生涯 その恋と歌」 小野勝美著(古川書房:昭和49年発行)

「二冊の書籍といくつかの奇縁 その2」につづく